

すばらしい黄道光の出現

山本 一 清

舊年末の二十六日、自分は朝早く岡山着、水野氏等に迎えられて講習會場に入つた。午前中は講演、午後は一休み、夕方には實地觀測のために廣場に出た。空は氣持好く晴れて、どんな小さな星でも見える。——フト西を見ると、意外にも、そこには偉大なる黄道光が見えるではないか！自分は一たび之れを怪んだ。何となれば時はまだ十二月の末で、(黄道光が全く見えないわけでは無いが)こんな大きな形のものが、今どうして見えるのだらう？、岡山は空氣が好いとは豫てから知つてゐるが、只それのみの理由で、此の立派な天象が今見えてゐるのだらうか？、餘り豫想外のことなので暫くは判斷に苦しんだ。見よ、この光りを。太陽が深く沒した其の西の地平から南に傾きながらの此の光芒が、正しく黄道に沿ふて天を横斷し、東へ延びに延びて、大丈夫、牡羊座にまで達してゐる。其の形は長さが長い割合に、幅はせまくて、脚部でも二十度を餘り多く出てゐない。只、光の強さに至つては、天頂を東西に流

れてゐる天の河と相對して、決してひけを取つてゐない。——此の夜の天の壯觀は、自分としても始めて見るところで啞然たらざるを得なかつた。幸ひ、見學のため集まれた講習員諸氏にも、星座の一通りを案内すると同時に、此の偉觀を紹介し、誠に好都合のデモンストレーションをなすことが出来た。

二十七日夕は曇り。二十八日の早朝、約束により床より起きて、又、廣場に出で、多くの熱心家と、乙女座に居ならぶ諸遊星を觀察した。此の時、又々日出前の東方地平線に、可なり著しい黄道光が見えた。この度は、長さは危ふく火星に届き兼ねるぐらゐであるが、脚元の幅は非常にひろく、爲めに全體の形は殆んど正三角形に見え、光力は決して侮れない強さであつた。

岡山に於ける觀察は、これだけで、二十九日に、自分は京都へ歸つた。しかるに、翌三十日の夜、けたまひ「電報」の聲に驚かされた。送達紙を開いて讀むと

コオドオコオミユアトフミミサワ

と、發信者は確かに信州諏訪の三澤君である。さて

はあの黄道光が諏訪で見えたのか——しかも其れが電報を發する程度に！自分は岡山下の觀察を思ひ起して、一種の興奮を感じた。早速、之れはブレテンものだと取り敢へずタイプをたゝいた。

翌三十一日の夜も、明けて元旦の夜も、自分は天文臺に上つて觀測をやつた。それと同時に黄道光の其の後は如何と、たへず西の空を眺めたが、生憎、飛來する雲片のために、兩夜とも、否其の次ぎの夜も、其の次ぎも、皆同じやうに、觀望は妨げられた。一月四日の夕、僅かの雲の隙から、再び黄道光らしいものを、可なり確かに認めたが、之は勿論月が落ちてからの時刻なので、少し過ぎた。——其の後は毎夜、月の光に妨げられてゐる。

諏訪の觀測報告は、年賀郵便と共に、歡びを以つて落手した。其の全文は左の通り。——自分は一行々々之れを讀んで行く中に、三澤、山岡兩氏の熱心なる態度と鋭利なる觀察とに、思はずも拍手喝采を禁じなかつた。まことに新春關頭、之れにまさる福音は無い。(卷頭の口繪を見よ)

拜啓

前便早速御報告申し上げて置きました通り我等兩人は何れも去る二十五日頃より日没後西天に黄道光らしきものを認めて居りました。然し時期が時期でありますから(冬至附近なので)實は半信半疑で居りましたが兩人共偶然一致しましたので其後の機會を狙つて居りました處幸本日も亦晴天なので(但し北西の疾風中々寒し)日没を待つて居りました。然るに午後六時半頃から又々例の黄道光らしいものが出現して彼の銀河と相對し銀河位の光度で然し斑でなく(山岡君は町の電燈の下でも充分認められたと話されました)實に西天の偉觀でありました、時に山岡君も來られ兩人して自宅(上諏訪町神田)の裏庭で觀測し星圖上に其位置及光度等を記入しましたが、餘りの美しさなので取敢えず電報を以て御報告申上げた次第であります、別紙は其觀測の要項并に山岡君のスケッチであります、謹んで貴覽に供します 敬白

上諏訪町ニテ

大正十年十二月三十一日午前一時

三澤 勝 衛

山本 先生 玉机下

黄道光觀測報告

一、觀測時刻 大正十年十二月三十日午後七時

二、觀測地 長野縣上諏訪町

三、等光線 (銀河の相當部分)

第一線 白鳥座の α 、 β 、 γ の間

第二線 カシオペイアの α 、 β 、 γ の間

第三線 白鳥座の ϵ 附近

四、幅、地平線附近に於て三十三度

五、高さ、七十二度

六、快晴、僅に西南山頂近くに斷續層雲を認めしのみ

七、場所、町の人家の裏

八、出現時間、午後六時三十分頃より同八時二十分頃迄以後は層積雲俄に出現し爲めに不明